古文単語 現代語訳の誤りを直す ②

高校／訳のどこが、なぜ違うかを見つけて直す

名前 _____

日付 _____

訳には、古語の意味の取り違えが1か所あります（誤りが無い訳も1つあります）。
訳から書き抜いて「誤りの語句」の欄に、正しい訳を「正しい訳」の欄に書く。
誤りが無ければ「誤りの語句」と「原因」の欄に「なし」と書く（「正しい訳」は空ける）。
原因は「原因」の欄に記号で答える。ア＝現代語の意味のまま訳した　イ＝その語の別の意味を選んだ

1 原文　冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。（枕草子・第一段）
訳　冬は努力するのがよい。雪が降っているのは言うまでもない。

誤りの語句	正しい訳	原因

2 原文　やがてかけこもらましかば、くちをしからまし。（徒然草・第三十二段）
訳　まもなく掛け金をかけて奥にこもってしまったならば、残念だっただろう。

誤りの語句	正しい訳	原因

3 原文　はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方がた、めざましきものにおとしめ嫉みたまふ。（源氏物語・桐壺）
訳　はじめから自分こそはと自負していらっしゃった方々は、この方をすばらしい者としてさげすみ、ねたみなさる。

誤りの語句	正しい訳	原因

4 原文　「我こそ死なめ。」とて、泣きののしることいと堪へがたげなり。（竹取物語）
訳　「私のほうこそ死んでしまおう」と言って、泣いて悪口を言う様子は、とても耐えがたそうである。

誤りの語句	正しい訳	原因

5 原文　つれづれなるままに、日ぐらし硯に向ひて、心にうつりゆくよしなしごとを（徒然草・序段）
訳　することがなく退屈なのにまかせて、一日中硯に向かって、心に浮かんでは消えてゆくとりとめもないことを

誤りの語句	正しい訳	原因

6 原文　いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。（源氏物語・桐壺）
訳　どの帝の御代であったか、女御や更衣がたくさんお仕えしていらっしゃった中に、それほど高貴な身分ではない方で、際立って胸をときめかせていらっしゃる方がいた。

誤りの語句	正しい訳	原因

7 原文　花紅葉のおもひも皆忘れて、悲しくいみじく思ひなげかるれど、いかがはせむ。（更級日記）
訳　花や紅葉を楽しむ思いもすっかり忘れて、悲しくすばらしく嘆くけれど、どうしようもない。

誤りの語句	正しい訳	原因

8 原文　ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。（枕草子・第一段）
訳　ただ一つ二つなどと、かすかに光って飛んでいくのもこっけいだ。

誤りの語句	正しい訳	原因

いちごドリル プリント

つづきの無料プリント
「古文単語プリント」のプリント一覧がひらきます

古文単語 現代語訳の誤りを直す ②【こたえ】

高校／訳のどこが、なぜ違うかを見つけて直す

名前 _____

日付 _____

赤い字がこたえ。「→」は手がかり。正しい訳は同じ意味の言い方なら正解にします（訳は自作）。

1 原文　冬はつとめて。雪の降りたるはいふべきにもあらず。（枕草子・第一段）

訳　冬は努力するのがよい。雪が降っているのは言うまでもない。

誤りの語句	正しい訳	原因
努力する	早朝	ア

→ 春はあけぼの・夏は夜・秋は夕暮れと、時間帯を並べている

2 原文　やがてかけこもらましかば、くちをしからまし。（徒然草・第三十二段）

訳　まもなく掛け金をかけて奥にこもってしまったならば、残念だっただろう。

誤りの語句	正しい訳	原因
まもなく	すぐに（そのままも可）	ア

→ 客を送り出した直後の動作。時間をおく「まもなく」ではない

3 原文　はじめより我はと思ひ上がりたまへる御方がた、めざましきものにおとしめ嫉みたまふ。（源氏物語・桐壺）

訳　はじめから自分こそはと自負していらっしゃった方々は、この方をすばらしい者としてさげすみ、ねたみなさる。

誤りの語句	正しい訳	原因
すばらしい	気にくわない（あきれたも可）	イ

→ すぐ後の「おとしめ嫉み（さげすみ、ねたむ）」と合わない

4 原文　「我こそ死なめ。」とて、泣きののしることいと堪へがたげなり。（竹取物語）

訳　「私のほうこそ死んでしまおう」と言って、泣いて悪口を言う様子は、とても耐えがたそうである。

誤りの語句	正しい訳	原因
悪口を言う	大騒ぎする（泣き騒ぐも可）	ア

→ かぐや姫を手放したくない翁が泣く場面。だれかを悪く言ってはいない

5 原文　つれづれなるままに、日ぐらし硯に向ひて、心にうつりゆくよしなしごとを（徒然草・序段）

訳　することがなく退屈なのにまかせて、一日中硯に向かって、心に浮かんでは消えてゆくとりとめもないことを

誤りの語句	正しい訳	原因
なし	—	なし

→ 「つれづれなり」＝することがなく退屈だ。訳は正しい

6 原文　いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。（源氏物語・桐壺）

訳　どの帝の御代であったか、女御や更衣がたくさんお仕えしていらっしゃった中に、それほど高貴な身分ではない方で、際立って胸をときめかせていらっしゃる方がいた。

誤りの語句	正しい訳	原因
胸をときめかせて	帝に寵愛されて（寵愛を受けても可）	ア

→ 女御・更衣は帝に仕える人。その中で際立つのは帝の寵愛

7 原文　花紅葉のおもひも皆忘れて、悲しくいみじく思ひなげかるれど、いかがはせむ。（更級日記）

訳　花や紅葉を楽しむ思いもすっかり忘れて、悲しくすばらしく嘆くけれど、どうしようもない。

誤りの語句	正しい訳	原因
すばらしく	ひどく（はなはだしくも可）	イ

→ 「悲しく」と並べて嘆きの程度を言う。ほめる意味ではない

8 原文　ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。（枕草子・第一段）

訳　ただ一つ二つなどと、かすかに光って飛んでいくのもこっけいだ。

誤りの語句	正しい訳	原因
こっけいだ	趣がある（風情があるも可）	ア

→ 夏の夜の蛍をほめて並べる段。笑える話ではない